

カーテンの裏側

吉川双葉

幼稚園が休みの日に、ピアニストの演奏を聞きに行くため、私は母と二人で出かけることになった。コンサート会場へ行くのはこれで二回目だった。一回目は三歳の時に行ったようだが、今ではもうほとんど覚えていない。

会場に近づくと、母はハンドバッグの中を覗き込み、手を入れて何やら探し始めた。チケットを探しているらしい。会場の入口には綺麗なお姉さんが笑顔で立っていた。母はバッグから見つけたチケットを二枚ともお姉さんに差し出した。私はお姉さんの手元をじっと見つめた。チケットが半分破られる。もぎ取られた半券は私の手に渡ることなく、二枚とも母が受け取った。

私達の座席は大ホールの二階席だった。ゲートを通り抜け、ロビーに進むと階段が見えてきた。階段は緩やかになっていて、幼い私でも一足飛びで駆けあがれる。何だか嬉しくなって二足飛びをしようとした。すると、後ろの方で母が「こけないようにね」と私に釘をさした。後ろを振り返って母の顔を見る。小さく「はあい」とだけ返事をした。

二階席に入る重たい扉を母に開けてもらい、あたりを見渡して座席を探した。先に座席を見つけた私は「あったよ」と小声で小さく母に教えた。座ればちょうど舞台の真ん中が正面にくる中央の席だった。任務を達成し、満足した私は席につく。正面を向くと、ライトに照らされた舞台が視界に入った。この席は舞台全体がよく見える。中央に鎮座するグランドピアノが黒く光っていた。

ブザーが鳴り、あたりは暗くなった。前回の記憶はほとんどなかったが、人は舞台袖から出てくることをしっかりと覚えていた。舞台の両サイドを見る。観客席から見て左のサイドカーテンがわずかに揺れていた。あの奥にピアニストがいるに違いない。そう思った。奥の様子が気になって首をうんと伸ばしたが、裏側までは見えない。斜め前に座るおじさんの後頭部も私の視界を遮る。母によく見えないことを報告しようと顔を横に向けた時、舞台袖からピアニストが現れたようだった。真っ青なドレスを身にまとった女性が、すでに中央まで歩いてきている。出てくる瞬間を見逃した私は、自分だけ置いてきぼりにされたような気がして、曲が始まってからもしばらく不貞腐れていた。

演奏も終盤に差し掛かり、コンサートが終わる頃には、私の機嫌もすっかり直っていた。最後の曲を弾き終えたピアニストに、割れんばかりの拍手が向けられていた。ピアノの前

に座るその女性は演奏の余韻に浸っているようだった。私は拍手をしながら、その姿に釘付けになった。すると、ピアニストは真っ青なドレスを引っ掛けないように、気を付けて椅子から立ち上がった。舞台の前まで出てくると、胸に手を当てながら、ゆっくりとお辞儀をする。どこからともなく現れた綺麗なお姉さんが舞台上のピアニストに花束を渡した。拍手の音は鳴りやまない。私の胸の鼓動は高まる。花束を受け取ったピアニストは再び一礼をし、観客席の方を見た。なんだか私を見ているような気がした。ピアニストは最初に出てきた方とは反対方向へ体を向けて、コツコツと音を立てながら、吸い込まれるようにサイドカーテンの裏側へ消えていった。

中学二年生になった私は、合唱コンクールのピアノ伴奏者に立候補した。抜擢された時は嬉しさ半分、不安半分でドキドキしたことを覚えている。発表の場で、たった一人でピアノを弾くのは初めての経験になる。そんな私は音楽の授業でも気が抜けなかった。

音楽室は東校舎の三階にある。教室を移動するため、教科書と筆記用具、楽譜を持って友達と一緒に向かった。その道中も妙に落ち着かなくて、慣れない校舎を歩く中学一年生に戻った気分だった。授業が始まると、さっそく合唱コンクールの練習時間になった。

「金賞取りたいよね！」

そんな会話をするクラスメイトの机の間を通り抜け、音楽室の端にあるピアノへと向かう。指揮者の男子が珍しく真面目な顔をしていた。

「ちゃんとやらなきゃ」私はピアノの椅子に座り、皆の顔を見渡して、身震いをした。ふと窓の外に目をやると、緑の葉をいっぱいに広げたソメイヨシノが悠然と立っているのが見えた。

九月になると、家のリフォームをするため、私は数ヶ月間マンションへ引っ越すことになった。ピアノは近所迷惑となり、家の中の練習は一切出来なくなった。私は担任の女の先生にお願いをし、始業前の一時間だけ、音楽室を借りられるようにしてもらった。その日から私は毎日、朝早く学校へ行ってピアノの練習をした。借りた音楽室の部屋にはカーテンが二枚ある。薄いカーテンの隙間から朝日が差し込み始める時刻は決まって同じ。その光が眩しくて、いつも練習の途中で遮光カーテンを閉めに行った。窓の外から聞こえるサッカー部の掛け声を、いつの間にか暗唱できるようになっていた。

合唱コンクール当日。舞台袖に立つ私はサイドカーテンの隙間から観客席を見た。暗闇に包まれた体育館はなんだかいつもと様子が違う。暗がりの中、ぼんやりと生徒達の顔が浮かんでいた。あの中に母もいるのだろう。保護者席で娘の発表を待っている姿が目につく。掌から汗がにじんでくる。司会者の声がマイク越しに響き、舞台の方へ目を向けた。スポットライトに照らされた舞台が眩しくて、私には不相応だなあと考えた。

指揮者の男子が「行くぞ」と小さく声をかけると、クラスメイト達はゾロゾロと動き出した。私も明るい方へと歩き始める。舞台上の小さな段差を超えながら、「つまづいたらどうしよう」と変なことを考えていた。

立ち位置へつくと、私と指揮者の男子にスポットライトが当たった。私は一礼をしてからピアノの前に座った。指揮者の男子の方へ顔を向けて、目線を合わせる。鍵盤に指を置いた。自分の手が少し震えていたが、気がつかない振りをした。息を吸って、指揮者と呼吸を合わせる。手が振り下ろされるタイミングで、一音を奏でた。そしてもう一音。静まり返った体育館に私のピアノの音だけが響き渡る。「あっ！」突然、どの鍵盤に指を置いたら良いのか分からなくなった。既に、左手は不自然な音を奏でている。汗が吹き出てきた。指揮者の男子の顔がまともに見れない。不協和音は続く。右手でメロディーを奏でながら、左手で正しい鍵盤を探した。「どこだ？ どこだ？」間違いが目立たないように鍵盤を弱く叩く。考えるより先に、ちゃんと指が覚えていた。「良かった……」正しい音を見つけるとすぐに立て直し、そこからは一度も間違えることなく伴奏を終えた。終盤に同じメロディーがあったが、その部分も間違えることはなかった。

拍手の音で我に返り、ピアノの椅子から立ち上がった。「あれだけ練習したのに」そんな想いを抱きながら、クラスメイトと共に観客席に一礼をする。顔をあげると、生徒たちの顔がはつきりと見えた。どの顔も目だけが笑っていないような気がした。ゆっくりと左を向いて、舞台袖のサイドカーテンまで歩く。舞台裏へと足を踏み入れた。舞台の裏側はなんだか湿っぽい。隅に目をやると、埃かぶったマイクスタンドが無造作に置かれているのが見えた。私はその場にただ呆然と立ち尽くした。「伴奏を間違えたから賞は取れないかも……」そんな考えが頭をよぎる。舞台裏には担任の先生がいた。すぐに駆け寄り、口を開きかけた。私が言わんとすること察したと思われる先生は顔を見るなり「大丈夫！良かったよ。だから早く席に戻りな」とだけ言った。それを聞いても、安心することはできなかつた。

全ての合唱が終わり、緊張がゆるんだ体育館には生徒達の喋り声が飛び交っていた。

「静かにしてください！」

そんな司会者の声が体育館に反響して、生徒達の声は段々と弱まっていった。もうすぐ、賞を受賞したクラスが発表される。私は自分の学年の順が来るのを静かに待つことにした。「それでは次に二年生の発表です！」

司会者は声を張り上げた。まずは銀賞クラスからの発表だ。「今年はこのクラスが銀賞を取るかな」私はそんな呑気なことを考えていた。「……え？」司会者が発表したクラスに驚いた私は思わず声がこぼれる。耳を疑った。理解が追いつかず、放心状態になった。

その間に、クラスの女子達の黄色い歓声が耳を通り抜け、男子達のガッツポーズが遠くでぼんやりと見えた。私達のクラスは銀賞だった。他クラスの拍手が私達に向けられる中、その音に負けないよう女子達が声を張り上げて私に言った。

「賞状を受け取ってきてよ！」

舞台上で賞状を受け取るなんて、そんなこと絶対にしたくない。しかし、クラスメイトの圧力に負けた私は、渋々指揮者の男子と壇上へ向かうことになった。複雑な思いがした。教室へ戻ると、クラスメイト達が楽しそうにお喋りをしていた。

「賞取れて良かったよね！」

「金賞だった一組の合唱、凄かったね〜」

「これで練習から解放されるぜー！」

私はひとり教室の前方へと向かい、賞状を教卓の上に丁寧に置いた。それを眺めていたら、少しだけ気持ちが落ち着いた。体育館シューズを片付けて、窓際の自分の席につく。あたりはもう暗くなり始めていた。しばらくすると、ある一言が聞こえてきた。教室は騒がしかったが、その言葉だけはしっかりと耳に入ってきた。あるクラスメイトの男子の声だった。

「ピアノ間違えたのに、なんで銀賞取れたんだろうな？」

その一言で心臓が飛び跳ねた。鼓動が段々早くなる。目に熱いものが込み上げてきた。周りに悟られたくない。そう思っただけで必死になってこらえた。呼吸が浅くなる。思うように息が出来ない。すると、窓の隙間から秋風が通り抜け、ゆったりとカーテンを揺らした。カーテンの動きを目で追うと、カーテンの裏側に茶色の染みがあることに気がついた。私は震える体でゆっくりと息を吐いた。